

まなこ

2001
No.42

企画・発行 武蔵野市児童女性部児童女性課女性計画係



ちょっとボランティア
友達の輪、世界に広げれ 木田アツ子さん

知りたい・聞きたい・考えたい
死後を託す「生前契約」って？
NPO日本生前契約等決済機構 黒澤淑子さん

特集 冠婚葬祭の中のジェンダーを見直そうよ！

私の人生。さて終幕は、どんなふうに迎えましょうか？

五十嵐ゆかりさん 千種 豊さん 小林庸子さん(親友のこと) 菊池真弓さん

レポーター会議報告

会議の前半は、41号『男女平等・今昔』の感想で、盛り上がった。
●妊娠、出産を経て仕事を続けていくことの苦勞など、若い世代の意見も取り上げてほしかった
●想像以上に、昔が男女不平等であったことに驚き、怒りを覚えた
●両親の影響、特に母親の息子への接し方に、カギがあるのでは
●ともに30代女性
●意見多数。
続いて、42号の特集『冠婚葬祭にみられるジェンダーの問題』について活発に、意見が交換された。
●初節句、七五三などの伝統行事は、ぜひ、残してほしい。
●現在の結婚制度に、疑問は持っていない
●むやみに、現在の制度に反対する必要はない。弾力性のある考え方が大切だと思う
●三姉妹の中で育ち、大学まで女子校で学んだため、特に差別を感じたことはなかったが、夫の実家でサンマを食べたとき、男性が頭の方、女性が尻尾の方でびっくりした
●夫の実家が、家を重んじる封建的な家風。長男が誕生したときは役目を果たしたような気持ちだった
●兄が亡くなった後に自分が生まれ、母は祖母から『男の子を殺して女を生んだ』と言われた。結婚当初に私自身も、親族から、当然夫の家の墓に入るべきと言われ抵抗を感じた

〔40代女性〕

「まなこ」42号の会議風景
1月17日(水)
午前10時～午後12時
市役所第4会議室にて

●葬儀は、遺族にとって便宜上あった方がよい。自分の葬儀は、身内と友人だけで静かに執り行つてほしい
●貯金をして、婚家の墓ではなく自分個人の墓を買いたい
●葬の部分を拡大して誌面に取り上げてほしい
●男女平等について考えていくと冠婚葬祭の問題に行き着くのでは
●編集長のこの発言で、2時間にわたる熱心な会議は、終了した。
(構成 森 治美)

情報エキスプレス

■ブラショフ市立産婦人科病院の洗濯機募金にご協力いただき、ありがとうございました！

40号のこの欄で紹介したブラショフの赤ちゃんに洗濯機を贈る募金活動も、今年の1月には460万524円が集まりました。病院の業務用大型洗濯機4基と乾燥機1基を購入するためには約1200万円が必要となりますが、差額は、事務局のNPOプロジェクトHOPEジャパンが負担。この春には無事、設置できる運びになりました。

多くの市民のみなさんによって募金活動が支えられ、事務局も専門機関として機種の選定や、交渉、設置を行うなど、一体となって実現したものです。

2月1日には、土屋市長も出席して目録の贈呈式が行われました。イオン・パスク駐日ルーマニア大使は、両国友好のシンボルとして大切に使うことを約束されました。

■「まなこ」の誌面に、あなたの声を

「まなこ」編集部では、毎号、テーマに沿ってアンケートを実施しています。今後もたくさんの方々の本音を取り上げ、年代や性別によって出てくるさまざまな考え方や価値観など誌面に反映させていきたいと思っています。アンケートにボランティア協力いただける市民の方(市内に在学・在勤・在住の男女)は、児童女性課 女性計画係まで。「まなこ」の内容に対する率直なご意見、ご要望も受け付けています。

■表紙のイラスト、デザイナーから一言

いろんな行事やしきたりの中で記念写真を撮ります。そんなとき、男は男らしく女は女らしく写るように意識している気がします。でも自分が死ぬとき本当に残っていて欲しい写真って「自分らしく写っている写真」なのでは？さて、何を思ってカメラの前に立とうかな…。

編集後記

☆「それでは、むなしすぎる」というクラスメイトの中で、ただ一人「人生とは、死に向かつて生きること」とゆずらなかつた高3のときの男友達は、今どうしているだろう。ふと、思い出した。
☆編集集中、2度葬儀に参列した。頭が『冠婚葬祭』でいっぱいなのは、取材の目で見えろキヨロ。他人の立ち話に聞き耳。「露のように消えたいわ」。「でも葬儀は遺族の慰めなのよ」にナルホド！
☆あまり身近でなかつた葬祭。生まれる場所を選べないが、死後の選択はできる。取材で、今までもあたりまえだと思っていた葬儀とその後が気になった。残された人が困らないように『覚書き』は必要だね。
☆散骨と献体に夢中になつて母を見限つて、高校生の息子が料理に凝り始めた。「勉強はいつするの」という言葉を飲み込んで、彼のチャールハンに舌つづみを打つ。これって、男女平等教育！？
☆息子が通う中学校から講演会の知らせが届いた。題は「みんなちがって、みんないい」金子みすゞの詩の一編だ。従来の葬式が少しずつ変わり始めている。その人の生きざまは終末の迎え方にもあらわれる。みんなちがって、みんないい。(矢島幸子)
☆暮らしの身近な問題を、男女平等の視点で問い直した1年間、「まなこ」はいかがでしたでしょうか。これからは社会的な方向にも目を向けていきます。みなさんから情報待っています。(向井一江)

STAFF

レポーター 厚沢尚子・池見美貴子・印南幸子
小川由華・長内レエ・加藤和子
菊池一郎・木田アツ子・久慈平憐
桑原照子・小林庸子・桜井弘子
末廣純江・橋戸 薫・福岡みゆき
星 詩子・細原弘雄・前野正江
真壁正江・三浦直子・吉田史美
渡辺美穂

取材・編集 倉内弘子・浜 俊子・本間則子
森 治美・矢島幸子・向井一江

デザイン 日比康人
印刷 コロニー東村山印刷所

冠婚葬祭の中のジェンダーを見直そうよ！

私達が快適な暮らしをするために、伝統的な文化や風習を、どのように受け継ぎ伝えていけばいいのでしょうか。冠婚葬祭の中に見え隠れするジェンダーを見直しながら、「まなこ」と一緒に新世紀にふさわしいしきたりを考えてみませんか？

※ 冠婚葬祭とは日本古来の四大儀式のこと。冠は元服の儀式で頭に冠をつけることに由来し、祝いごと全般。婚は結婚の儀式。葬は葬儀式。祭は祖先の祭祀に由来し、法事やそのほかの行事全般。
※ ジェンダーとは、生物学的性差ではなく、社会的・文化的に作られた女らしさ男らしさなど、そこから生まれる性による差別のこと。

冠婚葬祭

—冠（祝いごと）—

あなた自身やあなたのまわりで、誕生にまつわることから子どもの行事などに、ジェンダーを感じたことはありますか？

- ★初めての出産で長女が誕生したとき。男じゃなかったという、夫の両親の落胆ぶり。今さらながら、男重視の社会なんだ…と思った。女40代 中町
- ★12年ぶりに第二子が生まれた。「よかったですね男の子で、ご主人さまさぞお喜びでしょう」と言われ、上の娘は「じゃあ女の子の私は、何？」とむくれていた。女42歳 西久保
- ★長女を出産した直後、義父から男女産み分けのメモを見せられた。女50代 吉祥寺本町
- ★男の子が生まれてよかった、跡取りができてよかったという夫の両親の会話は、今でもよく憶えている。女56歳 吉祥寺北町

- ★お宮参りのとき母親の私は「お宮へ行くものではない」と言われ、台所でお客の料理作りをしていた。二人目、三人目のときもお宮参りに参加したいと義母に話したがダメだった。義弟のお嫁さんはお宮参りに。抗議すると「時代が…」と言われた。女40歳 緑町
- ★初節句、七五三は、最もジェンダーを感じる行事だが、日本の文化でもある。「力強さ」と「愛らしさ」は子どもへの愛情表現だ。今後もずっと残ってほしい。女42歳 境
- ★女兒の節句は雛人形で、その人形を早く飾り、早くしまわないと婚期が遅れると言われた。結婚することだけが、女性の幸せではないはず。女62歳 西久保

冠婚葬祭

—祭（さまざまな行事）—

親せき一同が会する行事や地域・職場・学校などでジェンダーを感じたことはありますか？

- ★正月に祖母の家へ行くと、男はごろ寝、女は料理などと忙しく立ち回らなければならない。だから、あまり行きたくない。ところが行かないと電話がかかってくる。女29歳 御殿山
- ★共働きをしていたときでさえ、盆・正月は一方的に夫の実家へ里帰り。当然のように男がゆっくりくつろいでいる中で、女は台所や親せきへの対応をせまられる。女35歳 緑町
- ★そういう機会は極力避けているが、やはり親せきが集まれば女だけが立ち働いて、男はなんにもせず。腹が立つ。皮肉をこめて、夫にはセッセと用事を頼み台所に立ってもらう。さぞや「こわい嫁さん」と思われていることだろう。女42歳 西久保
- ★こういう行事をとおして、地方の伝統が守られていく部分もあると思う。「伝統保存会」だと割り切ったらどうだろう。貴重な親交の場と前向きに考えたい。女45歳 吉祥寺北町
- ★まわりにはクリスチャンが多いので、特に困ったり悩むことはなかった。キリスト教では記念日にみんなが集う。金品の決まりもなく、さっぱりしている。女49歳 吉祥寺北町

- ★職場 女性には、弁当出しやお茶くみのためだけの残業があった。しかも当番制で。女36歳 境
- ★小学校のPTA 保育園の父母会にはお父さんがたくさん参加していたのに、小学校の保護者会はお母さんばかり。小学校は平日の昼間で、保育園は夜の集まりということもあるだろうが、PTAは、お母さんの役目？ 女42歳 西久保
- ★子どものこと 結婚して5年間、子どもに恵まれなかった。近所の方からどうして子どもがいないのか、まだなのかと、しつこく聞かれた。子どもがいないことは、女として欠けていることのように自分を追い込んでいた。今の時代なら産む、産まないは自分の生き方の選択として認められると思うが、あのころは少し辛かった。女49歳 吉祥寺北町
- ★結婚 職場結婚だったが、私もそのままずっと働いていたかった。当時は、結婚したら、女の方がやめることになっていたのに、家庭に入らざるを得なかった。女64歳 市内在勤
- ★地域 老人会、老荘大学などは、高齢男女の集まりだけに女性はまだ意見も言えずひたすらおとなしやかに。反発すると、まわりの女性にたしなめられる。女69歳 境南町

市民のみなさんから、アンケート形式で、冠・婚・葬・祭について聞きました。

—結婚—冠婚葬祭

結婚の制度（民法は、夫または妻の姓を選ぶ、同居の義務など）について、どう思いますか？

- ★「結婚したら、こうしなくてはいけない」と強制させられるのは、違うと思う。そもそも結婚自体が本人同士の自由意志なのだから。姓であれ、同居であれ、本人同士で決めるべきだと思う。女23歳 吉祥寺北町
- ★別姓でもいいし、必ずしも同居しなくてもいいと思うが、しかしそれなら結婚制度自体に意味がなくなっていくかもしれない。女29歳 御殿山
- ★女性が男性の家へ「嫁に行く」のではなく、対等に結婚するのが理想と思っていた。ところが現実には、長男の家へ「嫁に来た」と思われている。女34歳 境
- ★結婚したら女性が男性の籍に入り、姓を名乗ることがあたりまえになっているのに不満を感じる。女35歳 緑町
- ★別居していても姓が異なっても本人同士の気持ちがしっかりしていれば、取るにたらないこと。少子化の時代、どちらかの姓を選び続けていたら名字という文化すら失われてしまいそうだ。女36歳 境
- ★民法の改正（特に夫婦別姓・同姓選択性）、早く実現しないかなあ。事実婚が増えて、婚姻制度が有名無実化することでもいい。女42歳 西久保

- ★一度、離婚しているため、旧姓に戻ることが思いのほか大変だったので、二度目は事実婚にしている。出産後、子どもは母親である私の籍に入り、パートナーの籍へ移すには家庭裁判所に申し立てをする手続きが必要だ。前途多難だが、子どもには、成長に合わせて説明をしていく覚悟！ 女42歳 境
- ★特に疑問は感じない。結婚する以上このくらいは必要。海外では姓に関してもっと自由だが、うらやましいとは思わない。かえって面倒。(子どもが姓の選択に悩んだりして…)社会の基本は家族、みんなが同じ姓と一緒に住むことに大賛成。女42歳 境
- ★一夫一婦制については、当然のことと思う。法というより、モラルが大切だと考えるから。ただ姓についてはもっと自由に考えてもいい。女47歳 中町
- ★バリバリ仕事をしたい女性には、結婚で姓を変えたり、同居の義務など不便と思うが、自由になると、離婚や家庭崩壊も増えそうな気がする。女49歳 吉祥寺北町
- ★夫婦別姓では、わずらわしいことが多々生じてくると思う。それでもあえて言うならかまわないが…。同居については、法律で決められるべきではない。女50代 吉祥寺本町

男の側から、聞いてみました！！

☆婚姻による一夫一婦制については疑問がある。相当に無理がある制度だ。なぜなら、生涯一人の人だけを愛し、わき目もふらずに過ごすなんてこと、ありえないでしょう。もっとゆるやかに、お互い信頼関係で向き合えば、浮気だ、不倫だと いった離婚も増えずにすむと思うのだが…。男73歳 吉祥寺北町
☆長女は結婚式をしたのに、次女は婿さんの方針で、結納も結婚式もしなかった。その婿さん、自分の娘が嫁ぐときにはバ ージンロードを歩きたいそうだ。ああ！ 男83歳 中町

こんな意見もありました！！

★もういい加減、結婚したら女が男の実家の傘下に入る…みたいな風潮はなくなってほしい。やっぱり結婚って、家と家のものじゃなく、個人と個人のものだと思うから。女29歳 吉祥寺北町
★仕事の都合や心理的に相手の姓を選びたくないなら、変える必要はない。子どもの姓は外国風に、両方を名乗る方法もある。今後このような場合が増えるものと予想され積極的に論議すべき問題だ。同居は基本であっても義務ではない。ただ し、お互いの家族を思いやる気持ちがなければ成り立たないのも事実。女45歳 吉祥寺北町

どんな結婚・結婚式が理想ですか？

★私達の結婚は、披露宴もせず、お互いの両親と本人達で食事会をただけ。とってもおいしかった。女29歳 御殿山
★理想は、家と家ではなく、結婚する二人が主催者となっていること。式の招待状が父親の名前で来たり、本人に代わって 父親が挨拶するのはおかしい。女35歳 緑町
★夫の甥は、都内の小さな教会で、身内だけの式を挙げた。その後、近くの喫茶店に友人達が会費制でたくさん集まり、に ぎやかで楽しい披露宴。印象的だった。女47歳 中町
★自分の場合だが、昭和30年代は2千円の会費ですべてまかなえた。女64歳 市内在勤

言わせてくださるなら…

レポーター 桑原照子 80歳／西久保

夫婦の別姓が話題になったとき「まさか！」と思いましたが、それを支持する人達も予想以上に多いと聞き、驚いています。結婚して夫の籍に入ったら、その姓を名乗るのが当然と思っていました。私は三浦から桑原になったときは嬉しかったものです。現在、自分の名前で仕事が成功している人や、改姓がマイナスのイメージになる人にとって、別姓も一つの方法かもしれません。ただ、親子兄弟で名字が別々というのはどうでしょうか、子どもへの影響を考えることもあるんです。

大家族に嫁いで、自由に歩くことはできませんでしたが、幸い姑と一緒に子育てしてくれました。子ども達も成長し、やがて姑が亡くなり、そこで私は勤めに出了のです。今は夫もお墓の中。いつか一緒に所に入るまで地域で大いに羽をのばしています。

私達が受けた学校教育や家庭のしつけにくらべ、今の社会の価値観はどんどん変化してきますので、何もかも頭から否定をするわけではありませんが…。

男だから・女だからじゃないですよ

レポーター 厚沢尚子 31歳／緑町

学生時代には感じなかったことですが、勤めているとき、男性と同じことを言っても女は生意気だと見られました。男性の方は多少常識はずれなことをしても、大目に見られて、のびのびと個性を発揮しやすいと思うっていました。

結婚後、夫とおとしているいろいろ聞きするうちに、男にも大変なことがあるんだと気づきましたね。だから妊娠したときに、男、女

どちらでも健康に産まれてくれればいいと思っ ったし、長男である夫も「どっちが欲しい」なんて言いませんでした。

2歳になる息子は、公園で男女の区別なく楽しそうに遊んでいます。幼稚園・小学校と進み、このまま、たくさん友達ができたらいいなと願っています。

今は仕事をやめ、私も専業主婦。数年間のんびり子育てに専念して一息ついたら、何か始めてみたいです。そのときは、男だから女だからと限定しないで挑戦するつもりです。

冠婚葬祭は、親族交流の貴重な場

レポーター 細原弘雄 64歳／吉祥寺南町

関西から東京に出てきたせいでしょうか。親せきとの関係も年賀状の交換ぐらいで、会うことはめったにありません。

結婚式は、ふだん会う機会のない親族に近況を尋ねたり、新しく仲間入りする若い夫婦を紹介したりする貴重な場です。息子と娘の結婚式を経験していますが、そのための場所選びには、私の意見も取り入れてもらいました。もちろん親の力を誇示する場ではありません。

葬式も同様で、親しい者を亡くした悲しみを共有し、ありし日をしのいで語り合う。そしてこれを機にお互いの健康を気づかうなど、改めて親族の交流を確認し合うのです。

ただ、身内が集まる行事となると、忙しく立ち働くのが女性ばかりというのは気になります。伝統の中で受け継がれてきた役割分担の流れだと思いますが、今は話し合うことの大切さを問われる時代。女性が会話に参加できる状況を、男からも提案していきましょう。

冠婚葬祭

私の人生。さて終幕は、どんなふうに迎えようか？

持っていたいものは「おもいで」

五十嵐ゆかり 45歳 吉祥寺北町在住

昨年6月に五十嵐ゆかりさんは父親を亡くした。

「葬儀が済むとすぐ、遺体は献体として医科大学に運ばれていきました。遺骨はまだ帰りません。父は外科医として開業し、さまざまな人の生き死にを見てきました。生命は亡くなった瞬間から物理的に変化する。精神的なものは介入する余地がないと、物心ついたころから聞かされました」

父親は、医学生が遺体と向き合ったとき敬虔な気持ちになることをよく理解していた。燃やされてしまう前に、それが何かの役に立つのならと。

かつて父親が学生時代、勝手に結婚し連れて来た母親を、祖父母は快く思わず、母親は嫁ぎ先で苦勞した。

五十嵐さんは、父親の手で、帝王切開により7カ月の早産でこの世に生を得た。母親の枕元で「また、女か。女の子はっかりじゃしょうがないな」と祖父母は言った。教育者だった祖父だが、「女は女らしく」と言い、五十嵐さんは、よくかみついて蔵に入れられた。

「母も20年前に亡くなりまし

たが、献体登録をしており、通夜が終わるとすぐ持っていかれ、遺骨が戻るのに2年かかりました」。そのときは、母親がホルマリン漬けになっている夢を見たと言う。母親の希望で、婚家の墓に全部は入れず、母親の実家の墓などに分骨した。

「母の骨をくすねてお守りにしています。父の骨もそうすると思います。要するに私のDNAの一部みたいなものだと思うので」

(文 倉内 弘子)



五十嵐さんは、最近心の整理がつき、献体登録を済ませた。

「エンディングノート」に思いをこめて

千種 豊

54歳 御殿山在住

「ご臨終です」医師のその言葉に涙にくれるのも束の間、残された遺族は、時間に余裕のない次への手続きに追われることになる。悲しみや混乱の中で、知識のないまま葬儀社の勧める「人並みの基準」に合わせってしまう。それにしてもつかみどころのない金額に、戸惑いを感じた人は多いだろう。御殿山で自営業をしている千種豊さんは、これまで数多くの葬式に参列してきたが、ふと、判で押したような式次第どおりの葬式に疑問を感じた。そこで、葬祭コーディネーターを職業とする知人を講師に、地域で葬儀に関心を持つ仲間たち数人と、『自分らしい葬式について』の勉強会を開いた。葬式の手順とその意味を記したパンフレットを見ると、信仰する宗教上の決まりの中で、何段階も選択肢があることがわかった。

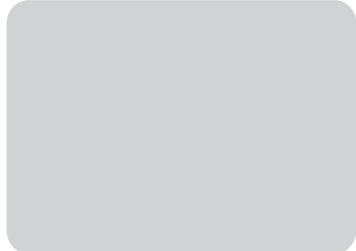
「少子化、核家族化、高齢化と、社会環境が大きく変化する時代です。今までタブーとされていた葬式の話をもっとオープンに話しても良いのではないのでしょうか。どう折り合いをつけ、終末を迎えるかは、どう生きていくかにつながると思います」

千種さんは、勉強会の中で

『エンディングノート』の存在を知った。これは、自分が亡くなった後、葬儀やそのほかの手続きなどを書き記しておく覚書だ。法的効力は無い。同世代の葬式に参列すると、死は生まれた順番で訪れるものではないことを痛感する。だから、そのためにも家族への思いや形見分けの品、葬式に呼ぶ人のリストなど、自分らしい葬儀の希望を、残されたものが悩まないように書き残そうと思っている。

これは、最後の「思いやり」かも知れない。

(文 矢島 幸子)



地域活動への出番も多い。今年は「ボランティアセンター武蔵野」の運営委員も。

自分らしいエンディングを考え、行動する4人の方々を紹介します。

心に残る花一輪

それは一昨年の3月、学生時代から小林庸子さんの親友だった一級下の女友だち、金谷千都子さんの訃報を伝える電話「死因は心筋梗塞、香典は花一輪でお願いします」から始まる。

祭壇には宗教色はなく、花に囲まれた棺と、お別れに捧げられた花だけ。別室には、食べ物と飲み物が用意され、訪れた友人が集まり、生前の思い出を語り合っていた。

救急隊の話では「胸が苦しくなった」と、自宅から金谷さん自身が救急車を呼び、受話器と靴を握りしめたままの状態に、救急車に運ばれ、病院に着いたときには息をひきとっていたと言う。靴から緊急連絡先が発見され、都内に住む彼女の姪から、北海道に住むお姉さんに連絡が届いた。

金谷さんは、冠婚葬祭のコンサルタントとして大手のデパートに勤務し、退職後は冠婚葬祭の評論家として活躍していた。離婚後、ずっと一人暮らしだったこと、仕事上の経験から『覚書き』を作り、お姉さんにその保管場所を知らせていたらしい。

毎年誕生日に書き直され、6度目とされる覚書きのとおり、葬儀が行われたのだった。その覚書きには、葬儀の構成や費用はもちろん、遺骨のことまで記載されていた。すべてを終えた残りは、婦人団体へ寄付することも。

金谷さんが何度も訪問し、気に入っていたスウェーデンの地。生前に必要な手続きをすませ、自分で望んだ場所での散骨だったと、小林さんは話してくれた。

「それは、自分の終末を自分で考えた見事な終焉でしたね」

(文 本間則子)



金谷千都子さんの思い出を語る小林さん。

締めくくりは、ドナーカードで

「私の葬式はしなくてもいいし、骨は公園の木の根元に肥料としてまいてくれても」と笑った菊池真弓さん。

会社の秘書をしていたが2年前に結婚。今は派遣社員をしている。「秘書をしていたころは役員たちの葬儀で、受付や案内などのお手伝いが何度もありましたが、結婚して間もなく山梨に住む義母が亡くなり、身内の葬儀を初めて経験しました」

同じ葬儀でも他人の家を手伝うのと、長男の嫁の立場でかわるのでは、大きく違う。

「通夜に火を絶やさないので仏さまの供養だから」と親族に言われ、菊池さんは一人で夜どおし線香と、ローソクの灯を見守った。

そのほか、仏さまを清める湯灌は逆さ水といって、水の中にお湯を入れなければいけないなど、昔ながらの風習やしきたりがあり、葬儀の手順はむずかしい。その上、供養のお酒やお茶の接待、気づかいで休む暇もなかった。

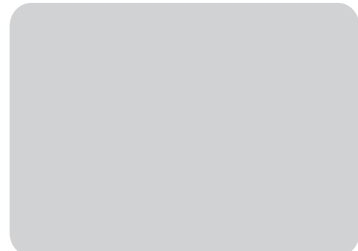
「義母は現役の公務員。大ぜいの同僚や義父の関係者などの弔問客で、葬儀はかなり大がかりなものでした。でも義母自身は自分の弔い方に希望がなかったのかと思い、もつという話をしておきたかったです。」

夫が私に『ぼくより先に死なないでね。こんなに煩雑な手続きや決めごとなんて、一人じゃできないから』と言いました」



ドナーカード

菊池さん本人は、骨の在り処はこだわらないが葬儀で日ごろ信じていないお経を唱えられるのはイヤだ。ただ、せつかくの身体はすべて役立てたいと思っている。「昨年から、夫婦でドナーカードを持ち歩いています」(文 浜 俊子)



ドナーカードは、コンビニや郵便局にも置いてあり、必要事項を記入するだけです。

「葬儀」に関する情報コーナー

「散骨・自然葬」

散骨とは、火葬によって焼いた骨を粉状にして、墓地以外の場所に散布する葬送の方法。最近では、日本でも認知されるようになってきた。地上での散骨は、法的に難しい場合が多く、全体の7割は海上となっている。

●(株)公営社(民間の葬儀社)

船、ヘリコプター、セスナ機などにより、陸地から20キロ以上離れた関東近辺の海で、海洋葬のみ行う。〔費用の目安〕船の場合、個人葬27万円 合同葬10万円〔問い合わせ〕TEL 03(3361)1067

●葬送の自由をすすめる会(ボランティア活動による市民運動団体)

万葉の昔からの伝統的葬法を復活するとともに自然破壊となる墓地の開発に反対している。環境問題の視点からあえて散骨と呼ぶ自然葬という。会員は1万人。発足から現在までの10年間に自然葬の実施は約900人。〔費用の目安〕一人あたり5万円〜17万円〔問い合わせ〕TEL 03(5684)2671

「献体」

医学、歯学の大学で行う人体解剖学の教育、研究に役立たせるため、自分の遺体を無条件、無報酬で提供すること。生前から、関連した団体に名前を登録しておく。その際には、肉親の同意の印が必要。

現在では、登録数増加のため、新規登録を停止している大学もある。

●(財)日本篤志献体協会

〔問い合わせ〕TEL 03(3345)8498

●白菊会本部

一九五五年に、東京大学の献体団体として出発し、日本各地に献体運動を広めた。〔問い合わせ〕TEL 03(3827)5131

「共同墓」

●SSSネットワーク(シングル・スマイル・シニアアラ

イフの略)ノンフィクション作家・松原惇子さん主宰。一九八八年に「個」を生きる女性たちの今と未来をよくする会として発足。府中ふれあいパークに会員のための永代供養の共同墓「個を生きる女性たちの碑」建立。仲間と集うよりどころとして「ローズクラブ」を開催している。SSSネットワークとともに入会金必要。〔費用の目安〕納骨埋葬費、維持費として20万円〔問い合わせ〕TEL 03(3492)1252

●もやいの碑(すがも平和霊苑内)宗派不問の合祀式納骨堂。『もやいの会』に入会し、家族関係や宗教を超え死後のすみかをともにする仲間作りを目指す。〔費用の目安〕入会費1万円 納骨埋葬費10万円〔問い合わせ〕TEL 03(3230)6969

「市民葬儀」

市民が、市内の指定業者の協力を得て、比較的安い料金で葬儀を行える制度。場所は、利用者が設定する。

●武蔵野葬儀社 TEL(22)2274

●(株)ヨシノ TEL(32)1030

〔利用方法〕

指定葬儀社に利用の申し込み。市役所か市政センターで、葬儀券の交付を受ける。印鑑が必要。葬儀券を、葬儀社に持参する。

〔問い合わせ〕

生活福祉課 TEL(60)1848

〔料金表〕

	第1種	第2種	第3種
祭壇	金欄5段 ¥165,000	金欄3段 ¥100,000	白布3段 ¥75,000
	第1種	第2種	第3種
霊柩車 (10kmまで)	指定車 ¥165,000	特別車 ¥100,000	普通車 ¥75,000
	第1種		第3種
火葬 (火葬料+容器)	最上等		中等
	大人 ¥51,800 小人 ¥27,000		大人 ¥25,600 小人 ¥13,900

●コミュニティセンターでも葬儀を行うことができる。使用は無料。直接、各センターへ連絡を。ただし、吉祥寺東・本町・吉祥寺西分館・中央公園北ホール・関前・西部の6館は使用不可。

(構成 森 治美)

